



カイロで売られているエーシュ・バラディ (筆者撮影)

## パンはエジプトの生命

土屋一樹

エジプトの主食は小麦粉で作ったパンである。典型的なパンは平たく円形で、二枚重ねのようになっていて、なかでも「エーシュ(エイシ、イーシュ、アエーシなどとも発音される)・バラディ」と呼ばれるパンがエジプトの主食の象徴となっている。

かつてはローマ帝国の穀倉地帯と言われたようにエジプトには農業に適した土地があり、小麦に関しても一九五〇年代なかばまでは輸出国であった。しかしながら、現在は小麦消費量の半分近くを輸入している。そのため、二〇〇七年後半以降の国際的な小麦価格高騰の際にはカイロなど都市部でパン騒動が起こった。今日のエジプトにとって、パン(小麦)は主食であると同時にその調達が必要な関心事となっている。本稿では、エジプトの主食であるパンとその原材料である小麦の調達について、最近の事情を紹介する。

### ●パンは生命

通常アラビア語でパンは「フブズ」というが、アラビア語圏でありながらエジプトではパンのことを「エーシュ」と呼ぶ。も

ともとエーシュとは「生命・生存・生活の糧」といった意味を持つアラビア語である。つまりエジプト人にとってパンは単に食糧のひとつというより、生命・生活の糧を象徴する食べ物だと言えるだろう。

パンにもいくつかの種類があるが、最も一般的なのがエーシュ・バラディである。政府の補助金付きエーシュ・バラディは安価(現在は一枚約一円)に抑えられており、国民の多くにとって文字通り「生活の糧」となっている。エーシュ・バラディ以外には、形はバラディと同様で精白度の高いエーシュ・シャミー、小型フランスパンのようなエーシュ・ファイノ、その他菓子パンなど、パン屋には様々な種類のパンが売られている(参考文献①)。

補助金付きエーシュ・バラディは、一枚一五〇グラムで直径約二五センチメートルの円盤形をしている。エーシュ・シャミーと比較すると精白度が低く、またトウモロコシ粉が二〇%ほど混じっている場合もあり、茶色っぽくざらざらしている。

エーシュ・バラディは、小麦粉に水、塩、イーストを混ぜて三〇分ほど寝かせてから

窯で五分ほど焼くことでできあがる。焼きたてはもちもちとした食感で、わずかに酸味がある。乾燥した気候のためか日持ちはいいが、時間がたつと固くなるので焼きたてを食べるのが一番おいしい。

エーシュ・バラディはどんな料理の時間も食卓に上る。千切つて前菜のゴマやナスのペーストをつけて食べたり、スプーンやフォークの代わりにエーシュ・バラディで肉や野菜をつまんで一緒に食べたりする。あるいは半分に切つて半円のポケット状にし、中に野菜や豆コロッケなどを入れたサンドウィッチもよく見かける。

パンはエジプトの食卓に欠かせない主食であるため、その原材料である小麦の確保は政府にとっても重要事項である。

### ●小麦の調達

主食であるパンを中心にパスタや菓子なども含め、エジプトは大量の小麦を消費している。近年の一人あたりの年間消費量は一七〇キログラム以上と世界でも有数の消費量となっている(参考文献②)。小麦はエジプトにとって欠かせない穀物であるが、

表1 主な小麦輸入相手国

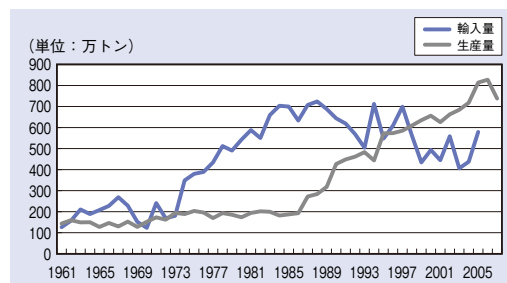
(単位: 万トン)

	2001	2002	2003	2004
アメリカ	230.9 (52.3)	179.8 (32.2)	148.8 (36.7)	176.2 (40.3)
オーストラリア	74.2 (16.8)	93.0 (16.7)	35.0 (8.6)	103.0 (23.6)
ロシア	2.0 (0.4)	110.4 (19.8)	87.0 (21.5)	50.4 (11.5)
フランス	43.3 (9.8)	86.4 (15.5)	87.3 (21.5)	47.7 (10.9)

(出所) FAOSTAT.

(注) かつこ内は全小麦輸入量に占める割合 (%)

図1 小麦の生産量と輸入量の推移



(出所) FAOSTAT.

過去二〇年で生産量が大幅に増加しているにもかかわらず、最近でも年間五〇〇万トン以上を輸入している。

エジプトで小麦輸入が始まったのは一九五〇年代末からであるが、一九七〇年代後半から輸入量が急増し、一九八〇年代なかばには年間七〇〇万トンを輸入するようになった(図1)。

一方、国内での小麦生産量は、農業改革政策が実施された一九八〇年代後半から拡大し、最近の生産量は七〇〇万トン以上と改革以前の約四倍に達した(図1)。農業改革政策によって小麦の生産・流通・販売の自由化が実施されたため、農家の小麦生産インセンティブが高まったことが増産をもたらしたと考えられる。

一九八〇年代後半以降の国内小麦生産量拡大に伴い輸入拡大傾向は止まったが、現在でも小麦はエジプトの主要輸入品目のひとつとなっている。では、エジプトはどこから小麦を輸入しているのだろうか。

ところで、これまで小麦輸入の大部分はエジプト政府が担ってきた。補助金付きのエーシユ・バラディ用の小麦粉は政府機関によって供給されており、主に輸入小麦が使われているのである。

表1は近年の主な小麦輸入相手国を示したものである。最大の輸入元はアメリカで、近年では全輸入量の三〇〜五〇%を占めている。もともとアメリカは一九五〇年代後半から食糧援助としてエジプトに小麦を提

供しており、政治情勢による中断はあったものの、一九八〇年代初めまでエジプトの輸入小麦の大部分はアメリカ産小麦であった(参考文献③)。

アメリカ以外の主な輸入元は、オーストラリア、ロシア、フランスである。これら三カ国は、年によって変動はあるものの、それぞれ全輸入量の一〇〜二〇%を占める。以上四カ国からの輸入は、一九八〇年代後半以降、平均するとエジプトの小麦輸入量の約九〇%を占めていた。

しかしながら、最近ではカザフスタン、ウクライナ、シリアなどからの小麦輸入が増加するなど、輸入元の多様化が見られる。以前の小麦取引にはエジプトおよび輸出国の政治的な意図も反映していたが、最近は価格がより重視されるようになり、その結果として輸入相手国の多様化が見られると考えられる。

また現在は買付輸入以外の調達方法も検討され始めている。例えばナイル流域国としてエジプトが関係強化を進めているスーダンとウガンダにおいて、エジプトからの直接投資によってエジプト向けの小麦生産を行う計画が模索されている。

### ●主食の安全と食糧保障に向けて

二〇〇七年後半以降の小麦の国際価格高騰の影響は、エジプトではエーシユ・バラディの購入行列の発生という形で顕在化した。補助金で安価となっているエーシユ・

バラディに需要が集中し品不足が起こったのである。幸いエジプト経済は近年まれに見る好況で財政状況にも比較的余裕があったため、政府はエーシユ・バラディの供給を拡大(補助金予算を増額)することで今回のパン騒動に迅速に対応できた。しかし、その結果として補助金付きエーシユ・バラディと補助金なしのパンの価格差が一層拡大し、主食であるパンの政府への依存度が高まることとなった。

今回の小麦価格高騰を機に、エジプト国内では小麦自給率に関する議論が再び活性化している。限りある耕作面積と、市場経済主義に基づく自由化が推進されるなか、主食であるパン(小麦)の安全保障をどう確保するのか、エジプトは長年の懸念に改めて取り組む必要性に迫られている。

(つちや いちき/アジア経済研究所 地域研究センター)

### 《参考文献》

- ①大塚和夫編『世界の食文化10 アラブ』農文協、二〇〇七年。
- ②Ibrahim, Fouad N. and Barbara Ibrahim, *Egypt: An Economic Geography*, I.B. Tauris, 2003.
- ③Dethier, Jean-Jacques and Kathy Funk, "The Language of Food: PL480 in Egypt," *MERP Middle East Report*, No.145, 1987, pp.22-28.